

令和元年6月21日現在

機関番号：34317

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H05614

研究課題名(和文) 米国による対日文化政策に関するハワイ大学占領期資料の調査研究

研究課題名(英文) An Investigative Research for Cultural Policy Documents from the Post-WWII Occupation of Japan by the United States, Stored at the University of Hawaii at Manoa

研究代表者

小泉 真理子 (Koizumi, Mariko)

京都精華大学・マンガ学部・准教授

研究者番号：60468527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 7,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後直後に米国に流出した文化資料を、デジタル化して日本に持ち帰り日本において閲覧可能とすることが目的であった。そこで本研究では、ハワイ大学マノア校図書館の協力の下、同図書館所蔵の貴重資料である、第二次世界大戦後の占領期に日本から米国に持ち出された一次資料(GHQが検閲した歌舞伎台本の英語版原本(全3,350ページ)、当時の様子を撮影した写真アルバム、日系米兵へのインタビュー等)をデジタル化し、日本に持ち帰り保管するとともに、インターネットで公開し、日本だけでなく世界から閲覧を可能とした。そして当該資料の分析により、当時の検閲方針に沿った形で実際の検閲も実施されたこと等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後日本は米国の占領政策により大きな変貌を遂げた。政治、経済、教育の変化は、人々に強く認識され、記録の入手も比較的容易である。しかしながら、文化については、占領下において、日本人がどのような環境でどのような表現・文化活動を行い、現在の基礎を築いたのか、人々の認識は低く、研究も少ない。この理由の一つとして、日本には関係資料が少ないことが挙げられる。そこで、本研究では海外の一次資料を発掘して、日本において閲覧できる環境を提供した。本研究が、さらなる戦後史研究や文化研究を誘発すること、そして外交や経済においても文化の重要性が高まっている現在、戦後日本の文化の基礎形成の把握に寄与することが期待される。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to bring back cultural documents, which were taken to the U.S. in the period just after WWII, to Japan and enable people to digitally browse through them in Japan. For that purpose, this research digitized primary source materials which a Japanese American soldier, who stayed in Japan during the occupation period after WWII, brought to the U.S. (Original English version of Kabuki manuscripts which were censored by GHQ (3,350 pages in total), albums which contain photos shot in Japan at the time, interview voice data of a Japanese American soldier, etc.), brought back the materials to Japan, and released most to the Internet by collaborating with the University of Hawaii at Manoa. This resulted in making the environment available to browse the documents not only from Japan but also from all over the world. Furthermore, this research analysis of the material content revealed the Kabuki censorship at the time conducted followed by the censorship policy, etc.

研究分野：文化政策

キーワード：文化政策 デジタルアーカイブ 歌舞伎台本 日本史 連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 戦後直後の文化関連資料の日本における欠落

戦後日本は米国の占領政策により大きな変貌を遂げ、政治、経済、教育の変化は、人々に強く認識され、記録の入手も比較的容易である。しかしながら、文化については、連合軍による占領下において、日本人がどのような環境でどのような表現・文化活動を行い、現在の基礎を築いたのか、日本に残されている関係資料が散逸・欠落・劣化して少ないことから、人々の認識は低く、研究も活発とはいえない。

### (2) 日本から海外へ持ち出された文化資料の発見

近年になって米国大学図書館を中心に、占領期における日本人の活発な表現・文化活動を示す資料が、次々と発見されている。しかしながら、その多くは日本において閲覧可能な環境にはない。本研究チームの先行研究調査(科学研究費補助金基盤研究(B)「米国による対日文化政策に関するコンデ資料の調査研究」)では、カナダのプリティッシュ・コロンビア大学図書館に寄託されている、敗戦後に連合軍最高司令官総司令部(GHQ)民間情報教育局(CIE)の映画担当責任者であったデヴィッド・コンデの一次資料をデジタル化して日本に持ち帰ることに成功した。当該先行研究調査の過程で、ハワイ大学マノア校図書館を訪問した折に、日本の占領期における貴重な一次資料の存在を同図書館に確認した。

## 2. 研究の目的

本研究は、ハワイ大学マノア校図書館の全面協力の下、第二次世界大戦後の連合軍による占領期において、日本から米国へ持ち出された歴史的価値のある文化資料を、同図書館所蔵の資料を中心に探索・収集し、同資料をデジタル化し、日本において公開し閲覧を可能とすることを目的とした。具体的には、同図書館に所蔵されている占領期にGHQによる検閲に用いられた歌舞伎台本の英語版原本「スタンリー・カイザワ・コレクション(“Stanley Kaizawa Collection”)」を対象として、デジタル化による保存及び公開を実施した。同資料には、検閲官による書き込み等が残されているため、当時の検閲方針を分析すること、当時の歌舞伎という表現活動の実態を把握することが可能であり、歴史的価値は極めて高い。しかしながら、戦後70年を経て資料の劣化が激しく、そして海外に持ち出されているため日本では閲覧が難しいという課題を抱えていた。そこで本研究では、同資料を日本で誰もが閲覧できるようにするとともに、同資料の分析により戦後直後の歌舞伎検閲を通して、日本の文化形成の一端を明らかにすることを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究が対象とした同資料には多様な素材が含まれ、台本、写真、インタビュー音声の3部で構成されている。135演目の台本(計3,350ページ)は薄紙にタイプで印字され、台本以外にもカイザワ氏が駐日したときに撮影した写真(360枚)と資料を収めたアルバム3冊がある。検閲官らは啓蒙や調査のために地方に多く出張したが、その際に撮影した風景や人々を始めとして、GHQ内の組織である民間検閲支隊(CCD: Civil Censorship Detachment)オフィス、検閲官やCCD日本人スタッフ、歌舞伎役者や舞台の様子等が写真として残されている。さらに、故・ハワイ大学マノア校James Brandon教授がカイザワ氏にGHQによる歌舞伎検閲についてインタビューした音声データも収録されている。

本研究では、米国大学が所蔵する日本に関する貴重な文化資料を、日本で閲覧可能にするため、グローバルな産学の連携により、以下の通り、デジタル化と公開作業や資料の分析を進めた。

2016年4月~9月 ハワイ大学マノア校図書館にデジタル化作業を委託するための覚書の締結  
研究体制の確認、デジタル化する対象資料の優先順位の決定

2016年10月~2018年11月 デジタル化作業

資料をデジタル化後にOCRで読み込み、利便性を考慮しテキスト化した。検閲官のメモ書き等はマニュアルでデータ化し、検索のためのノーテーションリストを作成した。写真はスキャン後に17項目のメタデータを作成した。写真の撮影場所や人物を、カイザワ氏による写真の裏書、画像の内容、知見者へのヒアリングにより可能な限り特定した。

2018年2月~2018年12月 ハワイ大学マノア校図書館のレポジトリにおける資料の公開作業

2018年8月~2019年2月 カイザワコレクションの内容の分析

研究体制は、日本側は大学の研究者、著作権や電子出版の実務家、米国側は大学図書館司書の体制で、グローバルな産学の連携を通じて推進した。そして研究者等への資料の利活用の促進のために、研究の過程で多くの対外発表を行い、研究成果を公表するとともに、資料を基とした人的ネットワークの形成に努めた。

## 4. 研究成果

### (1) 資料のデジタル化と公開

戦後直後に米国に流出した文化資料を、デジタル化して日本に持ち帰り、日本において閲覧可能とするという本研究の目的を、GHQが検閲に用いた歌舞伎台本の英語版原本等に対して、

デジタル化してインターネットで公開するとともに、日本に持ち帰り保管することにより達成した。

3年間の全体を通して、結果としてはデジタル化や公開作業は滞りなく、想定以上の量の資料を対象とすることができた。しかしながら、その作業過程では様々な調整や試行錯誤が必要であった。例えば、デジタル化作業をハワイ大学マノア校図書館に委託するにあたって覚書を締結したが、海外の大規模機関との契約ということもあり、支払いにおける為替差損の扱いや、研究の意義を訴求することによる同校の管理費の免除交渉、委託作業は3年間に亘るが契約期間は単年度への対応を要することへの工夫等を要した。そして同資料は、資料の劣化が進み、形式も一定ではないため、テキスト化にあたっての読み込み作業ではOCRだけでは対処できず、手作業での修正が必要となったり、インタビューテープのテキスト起こし作業では、録音状態が悪いことや、高度な歌舞伎用語、軍事用語の知識が求められる等、その都度問題を解決しながら、作業を進めていった。その甲斐もあって、徐々に作業のノウハウを蓄積することができ、作業のスピードを次第に増すことができた。研究開始当初は全資料のデジタル化作業を終了することができるかは不明であったが、2018年11月には、メタデータの作成やテキスト起こし等も含めて全てのデジタル化作業を終了することができた。

インターネットで公開できる資料に関しては、ハワイ大学マノア校図書館レポジトリより公開し、デジタル化した全資料は日本に持ち帰った。2019年1月から5月までの全世界からの同資料ファイルのダウンロード数は896であり、日本や米国を始めとしてドイツ、中国、ロシア、韓国、エルサルバドル、フランス、カナダ、オーストリアからアクセスがあった。

## (2) 資料の分析結果

第二次世界大戦終結後の占領期である1945年9月から1949年11月までの約4年間の日本において、GHQは歌舞伎を含むすべての演劇の台本を検閲した。検閲された台本の数合計10万近くにも及ぶ。検閲の目的は、将来において日本が再び戦争をおこさないように、日本の社会から封建制、軍国主義、天皇崇拜および極右的精神を消し去ること、そして日本の社会の中に、自由、民主主義、リベラルな政治思想を広めることであった。検閲は、CCDによって実施された。CCDは総司令部の諜報局内(G-2)に設けられ、郵便や電話電報を対象とする「通信(Communications)」と、出版・映画・演劇・放送を対象とする「PPB(Press, Pictorial & Broadcasting)」からなり、当初の規模は400人程度であったが、後に前者は6,000人、後者は1,000人程度の規模に増員された。PPBの人員の9割以上が日本人の翻訳や検閲要員であった。PPB内映画演劇部演劇課で歌舞伎の検閲が行われた。時期にもよるが、全国を3つに区分して東京、大阪、福岡に事務局を置いて検閲が実施された。東京地区のPPB内演劇課課長の下には、6~10人の日系二世の監督者と、30~40人の日本人翻訳者が働いていた。歌舞伎検閲の大まかな流れは、その時々によっても変更されたと推測されるが、歌舞伎の制作会社は上演の2週間前に英文の梗概を提出し、1週間前には日本語の台本2部と英訳された台本1部を提出して検閲を受ける。CCD内では日本人の翻訳者が基準と照らし合わせた情報を基に、米国人の検閲官が「許可」、「不許可」、「削除つき許可」を判断する。CCDには、命令を下し罰する法的な権限があるため、公演を中止することができた。

本研究では、2018年3月の段階でデジタル化が終了したカイザワコレクションの台本66演目(計1,744ページ)につき台本に加筆された部分(検閲官のメモ等)の全内容を調査し確認した。アルファベット表記されている演目名順に並べてデジタル化しており、全66演目名をここに表記できないが、「Adesugata Tatsumi no Irodori」から、「Kiyomasa Wakare no Hitofushi」までである。タイプされた台本に検閲官が記載した内容には、まずCCDの検閲済であることを示すスタンプが多くの場合に押されている。検閲官毎に固有のスタンプ番号を持つと推測され、「2034」はカイザワ氏を表していると推測される。他には、削除する文言に赤字で括弧が記載されていたり、理由が明確でないものもあるが、下線が引かれている部分が散見される。削除の対象となったのは、通常は単語や数行の表現で、GHQの基本政策として1つの場面や一幕をすべて削除させることはなかった。66演目のうち「不許可」(「Suppressed」)とあるのは、わずか3演目の『番町皿屋敷』、『双面苺姿絵』、『彦山権現誓助剣』であることがわかった。『番町皿屋敷』の梗概は1945年10月18日付で作成され、台本1ページ目の右上にメモで「Suppressed 8 Nov 45」とあり、1945年11月8日付で「不許可」となったことがわかる。実際には一度は興行されたのちに不許可となったと考えられ、公演を検閲官が観劇して、女性には価値がなく皿一枚のために殺されることが受入れられないと判断したことが、不許可となった理由のようである。そして2つ目の「不許可」となった演目『双面苺姿絵』の梗概には、不許可になった理由は記載されていない。3つ目の『彦山権現誓助剣』の台本には、さらにメモ書きで「Revenge Issue」と記載され、仇討ちが禁止理由となったことが確認できた。そして、66演目のうち、「特別許可」(「Special Pass」)となっているのが『今様薩摩歌』、『鬼一法眼三略巻 菊畑』の2つであった。前者は、全54ページのうち14ページに、文言に赤字の括弧が付記され、削除の指示がなされている。後者は封建的忠義のために一度「不許可」となりかけた後に「特別許可」に変更されたと推測され、「Suppress under feudal loyalty」と一旦記載されるも、同記載に打ち消す線が引かれた上で、「Special」と記載されている。

このように、同台本に記載された検閲官の書き込みを詳細にみていくと、当初の検閲の目的に沿った形で実際の検閲が行われたこと、日本の歌舞伎制作者側から提示された台本の内容に関

して、CCD から大幅な修正が要求されたわけではなかったことが、分析の範囲で明らかになった。

また、カイザワコレクションに対応する台本の日本語版原本の一部が、日本の公益財団法人松竹大谷図書館にも所蔵されていることがわかっていった。しかしながら、日本語版と英語版でどの程度演目が一致しているか不明だったため、本研究で両版の演目の照合作業を行い、松竹大谷図書館とも照合内容を共有し連携を深めた。本研究により、日本においてもテキスト検索可能な状態で英語版が閲覧可能となったため、今後の比較研究の促進が期待される。

### (3) 成果の对外発表

本研究の成果を、国際シンポジウムや報告書(冊子)の作成を通して对外発表に努めた。2018年10月には、日米の研究者による一般向けシンポジウム「戦後直後の歌舞伎検閲を通して文化について考える」を、東京とハワイをインターネット中継する形で同時開催し、両国で約100名の参加があった。そして、3年間の研究成果を纏めた報告書を作成し、関係者及び希望者に配布した。

### (4) 今後の研究への期待

創造経済やソフトパワーといった言葉が表すように、2000年以降は経済や外交においても文化の重要性の認識が高まっていることから、戦後日本の文化の基礎形成に関する分析は我々にとって必携といえる。本研究のように、占領期に日本から海外へ持ち出された一次資料の存在を明らかにすることは、歴史の流れの中で、文化がいかに扱われてきたかの事実の一つを世に残すことにもなる。占領期の表現活動についてのさらなる研究の促進と、類似の資料調査研究の誘発が期待される。

### <参考文献>

- 浜野保樹、偽りの民主主義 GHQ・映画・歌舞伎の戦後秘史、角川書店、2008
- 山本武利、GHQの検閲・諜報・宣伝工作、岩波書店、2013
- Brandon, James、鈴木雅恵訳、歌舞伎を救ったのは誰か?--アメリカ占領軍による歌舞伎検閲の実態、演劇学論集：日本演劇学会紀要、42、2004、145-197

### 5. 主な発表論文等

#### [学会発表](計5件)

- 上條由紀子、小泉真理子、寺田遊、米国大学所蔵の対日文化政策に関する占領期資料のデジタル化に関する研究、日本知財学会 第16回年次学術研究発表会、2018
- 小泉真理子、上條由紀子、米国による戦後の対日文化政策に関する研究：歌舞伎脚本の検閲資料を基に、日本文化政策学会 第12回年次研究大会、2018
- Tokiko Y. Bazzell、Allied Occupation of Japan Related Resources @ University of Hawaii at Manoa Library -The Stanley Kaizawa Kabuki Collection & Others-、Council on East Asian Libraries (CEAL) 2018、2018、  
[https://www.eastasianlib.org/newsite/wp-content/uploads/2018/09/P4\\_Bazzell\\_CJM2018\\_1.pdf](https://www.eastasianlib.org/newsite/wp-content/uploads/2018/09/P4_Bazzell_CJM2018_1.pdf)、(2019年3月1日現在)
- 小泉真理子、上條由紀子、寺田遊、米国大学に所蔵されている対日文化政策に関する占領期資料のデジタル化及び公開、デジタルアーカイブ学会 第2回研究大会、2018
- Tokiko Y. Bazzell、Bringing hidden resources to light: the Stanley Kaizawa Kabuki Collection at the University of Hawaii at Manoa Library、The 28th European Association of Japanese Resource Specialists (EAJRS) Conference、2017、  
<https://www.eajrs.net/2017-oslo> (2019年3月1日現在)

#### [その他]

- デジタル化した資料の公開ホームページ、ハワイ大学マノア校図書館レポジトリ、  
<https://evols.library.manoa.hawaii.edu/handle/10524/57059> (2019年3月1日現在)
- アクセスデータ統計ホームページ、ハワイ大学マノア校図書館レポジトリ、  
<https://evols.library.manoa.hawaii.edu/statistics/handle/10524/57059> (2019年3月1日現在)
- 研究紹介ホームページ、京都精華大学全学研究センター、  
[http://www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/?post\\_type=project&p=3200](http://www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/?post_type=project&p=3200) (2019年3月1日現在)
- 企画シンポジウム「日米大学間ライブディスカッション「戦後直後の歌舞伎検閲を通して文化について考える」」、主催(京都精華大学、ハワイ大学マノア校図書館、ハワイ大学マノア校日本研究センター)、場所(東京、米国ハワイ(2会場インターネット中継))、2018年10月6日(東京)、10月5日(米国ハワイ)
- 企画展示会「Nisei Linguists and the Post-WWII Occupation of Japan: The Stanley Kaizawa Collection」、主催(ハワイ大学マノア校図書館)、場所(ハワイ大学マノア校図書館)、2018年9月1日~10月31日

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：上條由紀子

ローマ字氏名：( KAMIJO, yukiko )

所属研究機関名：慶應義塾大学

部局名：大学院政策・メディア研究科

職名：特任准教授

研究者番号 ( 8 桁 ) : 70361681

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：バゼル山本登紀子

ローマ字氏名：( BAZZELL, tokiko Y. )

研究協力者氏名：萩野正昭

ローマ字氏名：( HAGINO, masaaki )

研究協力者氏名：寺田遊

ローマ字氏名：( TERADA, yu )

研究協力者氏名：櫻井英里子

ローマ字氏名：( SAKURAI, eriko )

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。